

指導資料

外国語 第81号



鹿児島県総合教育センター
平成28年10月発行

対象
校種

幼稚園 小学校 中学校

高等学校

特別支援学校

「話すこと」における 即興力の育成を図る指導の工夫

学習指導要領「英語表現Ⅰ」の内容には、与えられた話題について即興で話すことや、聞き手や目的に応じて簡潔に話すことなどの言語活動の設定が求められている。そこで、「話すこと」における即興力の育成を図る指導のポイントや具体的な活動例を紹介する。

1 学習指導要領の内容について

「英語表現Ⅰ」は、情報や考えなどを伝える能力を養うことを目的として設定されたものであり、「話すこと」を中心とした活動について、学習指導要領には次のように明記されている。

【英語表現Ⅰ】2の(1)のア

与えられた話題について、即興で話す。
また、聞き手や目的に応じて簡潔に話す。

また、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages 「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠」) は、発話の評価や分析の方法について、大きく分けて、一方向的なコミュニケーション (発表) と、人との相互コミュニケーション (やりとり) の二つに分類できるとしている。

日常生活において最も頻繁に行われる「話す」活動は即興で話すことであるが、

授業ではスピーチなどの発表型の活動が多くなる傾向にある。事前に準備したスピーチやプレゼンテーションでは、前もって練習したり、話す内容を暗記したりすることにより、流暢で、正確で、複雑な文構造をもつ英語で発表できることが多い。一方、即興で意見や感情などを英語で伝えることは、しばしば生徒にとって難しく、複雑さ、流暢さ、正確さを失いがちである。

岡部・松本 (2010) は、「即興で話す活動は教室内で指導されるべき最も重要な言語活動である。」と述べている。即興で話すとは、日常の会話や意見の交換をする際に、不適切な間をおかずに話すことを意味する。現実のコミュニケーションにおいては、相手の質問に答えたり意見に反応したりする際に、文章を頭の中で組み立てる時間を十分に確保することができない場合が多い。

したがって、日常の話題や情報などにつ

いて、話す内容を前もって準備せずに、即興で事実や意見、感情などを伝え、また、相手の意見を的確に理解し、自分の意見と対比しながら考えや気持ちを英語で適切に伝え合う力を育成する活動を指導計画に位置付ける必要がある。

2 即興力の育成を目指す言語活動の充実

(1) 言語材料の精選

言語活動充実のためには、教科書単元の全ての言語材料や練習問題を扱うのではなく、活動を行う上で必要な言語材料に焦点化して指導するなど、精選する視点をもつことが大切である。また、言語材料の指導や練習問題のみに多くの時間を費やさないう留意したい。

(2) 即興力の育成を目指す言語活動の実施

教師は、授業を通して生徒の自律的な学習を促進する役割を果たさなければならない。今井・高島(2015)は、「教師は生徒を単に『言語学習者』でとどまらせず、言語学習のゴールとしての『言語使用者』へと成長させる意識をもつ必要性がある。」と述べている。

生徒は自分の意見や感情を伝える際に、本当に伝えたい内容を英語で伝えることに難しさを感じていることが多い。また、英語で伝えたり発表したりする際に、正確な英語で話したいと考えるために、例文の単語を変えるだけの機械的な発言になったり、自分の真の意思とは異なる既習の表現を使用したりすることがある。

「英語表現」の授業は、インプット（理解）→インテイク（定着）→アウト

プット（表現）という活動の流れになることが多くなりがちである。このような場合、アウトプット活動の内容を工夫することによって、生徒が即興で話す活動を行うことは可能である。ただし、例文や練習問題で扱った表現のみを使った対話だけでは、実際の言語の使用場面を設定した表現活動として不十分である。

そこで、即興力を育成する指導の際は、まずアウトプット活動を行い、その後生徒が自身の表現活動を振り返る時間を取り入れたい。この時間を使って、生徒は、現段階でうまく伝えられたことや伝えられなかったことなどの自らの言語能力の課題に気付くことができる。その後、教師は、生徒の課題に応じたインプット及びインテイク活動を行う。その際、教師は、生徒がよりの確に自分の考えを伝えることができる表現を厳選してインプットさせ、定着を図ることに留意したい。

3 即興力の育成を目的とした指導例

即興力の育成を目的とした指導について、以下に例を示す。

(1) 目標

夏休みの思い出について流暢にやりとりをすることができる。

(2) 言語材料

時制

(3) 手順（例）

ア 生徒を4人のグループに分け、ペアで夏休みの思い出について、即興で対話をさせる。生徒の実態に応じて、事前に話す内容を考える時間を設定して

もよい。対話はグループ内で相手を変えて複数回行う。

イ うまく伝えることができなかつたり、適切な反応や質問ができなかつたりした内容をワークシートに記入させる。

ウ イの内容を個人で振り返らせた後、グループ内でそれぞれの課題を共有し、解決を図るための意見を出し合わせる。

エ グループ内で解決できなかった表現等について、教師がインプット活動を行う。

オ 再度、対話活動を行わせる。(状況に応じてペアを変える。)

カ 生徒は、アとオの段階における自分の発言内容の深まりや変容、また、表現できなかったことについて自己評価する。

【教師による導入及び予想される生徒の対話例】

T: The Rio Olympic Games were held in Brazil this summer. Did you watch it? How about this summer holidays? Are there anyone who traveled anywhere? Today, I want you to talk about your summer holidays to your partner in English. OK? Shall we begin?

S1: What did you do this summer? Did you go anywhere?

S2: Yes, I went to Okinawa with my family.

S1: Oh, you went to Okinawa. How did you feel? Did you enjoy it?

S2: Yes, I had a good time.

S1: Where did you go in Okinawa?

S2: We went to the Shuri Castle. I was

very excited to see such a beautiful castle.

How about you? Did you go anywhere?

S1: No. I was very busy practicing tennis during the summer vacation. I was very tired, but the club activities were a lot of fun.

※ 下線を引いた表現などの対話を促すために必要な表現を Model Question や Model Answer として、生徒の実態に応じて事前に提示してもよい。

4 言語活動設定のポイント

今井・高島(2015)は、「活動を通して生徒が達成感を実感し、英語学習への自信につなげるためには、活動の難易度を操作し、より適した言語活動とする必要がある。」と述べている。また、難易度に関する要素としては、「内容に関する背景知識の有無」、「伝達すべき情報量」、「活動が生徒にとって身近なものか」などを挙げている。したがって、英語によるコミュニケーションに対する生徒の意欲や関心を一層高めるためにも、生徒が取り組みやすいテーマから始め、段階的に難易度を高めていくことに留意したい。

この活動では、うまく表現できたことに対する達成感や成就感を生徒に味わせるとともに、うまく表現できなかったことに対しては、3の(3)のイ及びウの活動を通して、自らの言語能力の課題に気付かせ、それを主体的に解決させることで、次のステップにつなげていくことが大切である。また、教師は、個人の課題分析やグループでの学び合いを踏まえ、効果的なインプッ

ト活動を行いたい。

例えば、適切な応答の表現として、沖縄に行ったという友人に対し、「いいなあ。」と表現したかった生徒に対しては、"I envy you."という表現を、夏休みは部活動で忙しかったという友人に対し、適切な応答ができなかった生徒に対しては、"So you got suntanned, didn't you?"や"You must be a good player."といった表現を示すことなどが考えられる。

「話すこと」を中心とした活動では、間違いを恐れずに活動に取り組ませることが大切である。一般的に文法的正確さに対して最も神経質なのはネイティブ・スピーカーではない外国人英語教師であるといわれる。したがって、指導を行う際は、発音や文法的な正確さよりも、事実や意見、感情などを相手に何とかして伝えたいというコミュニケーションに対する生徒の積極性を大事にすることが重要である。

一方で、間違いを恐れずに活動に取り組ませることは大切であるが、誤りをそのままにしておくのではなく、活動後に発話した表現をワークシート等に記入させたり、必要に応じて文法的な説明などのインプット活動を行ったりすることにより、生徒の言語能力の向上を図りたい。

5 評価に関する留意点

「英語表現 I」は、「話すこと」及び「書くこと」の技能を中心に扱う科目であるので、評価は、実際に生徒が話したり書いたりしたことを基に行わなければならない。それ故、ペーパーテストのみによる評

価にならないように留意する。特に、「話すこと」の評価においては、スピーキングテストなどのパフォーマンステストを複数回取り入れ、即興で話すことについても評価を行いたい。

パフォーマンステストを行う際は、主観的な評価に陥らないようにしなければならない。客観性及び信頼性の高い評価を行うためには、全体的な印象で評価するのではなく、流暢さ、内容、正確さなどの評価の観点と基準を設定しておくことに配慮したい。また、教師間の連携も必要不可欠である。例えば、生徒の実際のスピーキングテストの様子をビデオで撮り、担当教師間で評価の基準を揃えておくことで、客観性をより高めることができる。

指導と評価は一体的なものでなければならない。評価される状況は、生徒にとって不安であり、間違いを恐れ、その結果、沈黙してしまうことがある。したがって、指導の際には、活動の目的並びに評価の観点と基準をあらかじめ生徒に明示しておくことも必要である。

「話すこと」における即興力を含めたコミュニケーション能力の育成に向けては、生徒が自分の能力の成長を実感できる場面を設定することが必要である。生徒の実態を捉えながら、中・長期的な見通しをもって、継続的な指導を心掛けてほしい。

—引用・参考文献—

- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』平成22年5月、開隆堂
 - 岡部幸枝・松本茂編著『新学習指導要領の展開 外国語科英語編』平成22年4月、明治図書
 - 今井典子・高島英幸編著『小・中・高等学校における学習段階に応じた英語の課題解決型言語活動』平成27年6月、東京書籍
- (教科教育研修課)